

2021 年度事業報告 附属明細書

附属明細書 1 会員一覧

附属明細書 2 主催セミナーに関する事項

附属明細書 3 留学生会館入居状況

附属明細書 4 留学生論文の表彰に関する事項

附属明細書 5 留学生対象「日本語論文の書き方講座」に関する事項

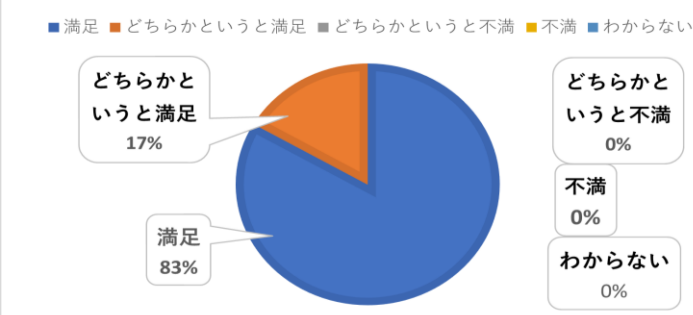
会員一覧

2022年3月31日現在

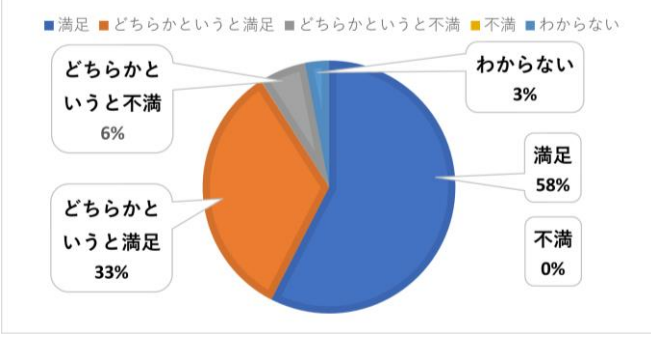
正協力会員名称			
1	東京工業大学	23	東洋大学
2	東京外国語大学	24	日本女子大学
3	東京学芸大学	25	法政大学
4	東京農工大学	26	明星大学
5	お茶の水女子大学	27	立教大学
6	電気通信大学	28	早稲田大学
7	一橋大学	29	東洋英和女学院大学
8	東京都立大学	準協力会員名称	
9	青山学院大学	30	東京工業高等専門学校
10	桜美林大学	31	白梅学園短期大学
11	大妻女子大学	賛助会員名称	
12	慶應義塾大学	32	(株)幼体連スポーツクラブ
13	工学院大学	33	(株)スリーボンド
14	国際基督教大学	34	安藤物産(株)
15	駒澤大学	35	多摩信用金庫
16	芝浦工業大学	36	大成建設(株)
17	上智大学	37	相羽建設(株)
18	創価大学	38	第一屋製パン(株)
19	中央大学	39	ハウスコム(株)
20	帝京大学	40	(一社)ジャパンケネルクラブ 川崎ユース犬友クラブ
21	東京工科大学		
22	東京都市大学		

2021 年度事業報告 附属明細書2 主催セミナーに関する事項

事業名	第2回アメリカセミナー(オンラインセミナー)
期日	10月3日(土)
主題	転換期のアメリカ未来を探る
対象	大学生、社会人
趣旨	<p>2020年、米国で新しい大統領が選出される。これまでアメリカは「リベラルな世界秩序」の盟主を自負し、その関与の度合いやあり方に濃淡はあったものの、世界秩序への関与そのものを放棄することはなかった。しかし、2016年に大統領に選出されたトランプは、「米国第一」を掲げ、気候変動対策のためのパリ協定など、様々な多国間協調枠組みに背を向け、露骨に国益を追求してきた。民主主義や人権など、従来アメリカ外交が一その実践には数々の欺瞞があったにせよ一目標として掲げ続けてきた価値観にも、トランプは関心を持っていない。国内でもトランプ政権は、報道の自由や人権、三権分立など、憲法が定めるところの基本的な価値をさまざまに蹂躪している。</p> <p>トランプのような大統領を誕生させたアメリカでは、何が起きているのか。2020年の大統領選はどうなるのか、その結果次第でアメリカの政治や外交は軌道修正されていくのか。それとも「米国第一主義」は、トランプ一人のものではなく、より構造的なものなのか。市民、国際社会、同盟国である日本は、アメリカと今後、どう向き合っていくべきか。アメリカのいまを知りたい人のみならず、世界秩序と地球の行方に関心を持つ人の参加を広く歓迎する。</p>
企画委員・講師	<p><企画委員兼講師> 三牧聖子(高崎経済大学経済学部国際学科准教授) 前田幸男(創価大学法学部教授) 五野井郁夫(高千穂大学経営学部教授・国際基督教大学社会科学研究所研究員) 峯村 健司(朝日新聞編集委員「外交・アメリカ中国担当」・北海道大学公共政策学研究センター研究員)</p>
定員	60名
参加者	71名
アンケート結果	<p>■満足 ■どちらかと言うと満足 ■どちらかと言うと不満 ■不満</p> <p>どちらかと言うと満足 12%</p> <p>満足 88%</p> <p>どちらかと言うと不満 0%</p> <p>不満 0%</p> <p>(回答 25名)</p> <p>※満足 22名 どちらかと言うと満足 3名 他 0名</p>

事業名	第10回新任教員研修セミナー(オンラインセミナー)
期日	8月31日(月)～9月1日(火)
主題	アクティブ・ラーニング、その導入から深化へ — オンラインでも学び続けるチャレンジ —
対象	教職員
趣旨	<p>近年の日本の大学教育では、たしか知識や技能を身につけるとともに、分野や立場の違いを超えて協働することのできる知性を育むことが求められています。また、激しい変化の時代を豊かに生き、社会に貢献していく能力の基盤となるような、学び続ける姿勢や力を培う教育も切実に希求されています。こうしたかつてないほどの期待と要求に応えるべく、多くの大学に導入されたのがアクティブ・ラーニングであることは言うまでもありません。しかし、そうした学びを引き出していきわたしたち大学教員の理解やスキルは必ずしも十分ではない、というのが実感ではないでしょうか。アクティブ・ラーニングは、導入から量的な拡大という段階を経て、今まさに質的深化が問われる時代へと突入しています。そうした深化に資するために、本セミナーでは、アクティブ・ラーニングを円滑かつ効果的に実施する上で不可欠な相互理解や人間関係の構築に始まり、発達障害などの困難を抱えた学生への対応に至るまで、アクティブ・ラーニングの基礎、理論、様々な実例などを体験的に学び、参加者がそれぞれ担当している授業を質的に深化させる機会を提供します。そして、言うまでもなく、今回のコロナ禍により、高等教育は多くの困難に直面しています。その中で、学生たちの学びを止めないように、大学教員は様々な工夫をして授業を行なっています。しかしながら、「オンラインでのアクティブ・ラーニングは難しい」「資料の準備や課題の添削に追われて倒れそう」「学生の反応が見えない」「成績評価をどうしたら良いのか」「ICT環境が十分でない学生への対応はどうすべきか」「オンライン授業に関する支援部署がない」など、教員の悩みは尽きません。そこで、今回で第10回目となる本セミナーでは、「アクティブ・ラーニング、その導入から深化へ — オンラインでも学び続けるチャレンジ」をテーマに焦点を合わせていきます。</p> <p>大学セミナーハウスは、大学教員相互の交流を図ることによってわが国の大学教育の向上・発展に寄与することを目的としており、今年度も学術・文化・産業ネットワーク多摩との共催で国公立大学の枠を越えたオンラインセミナー形式の新任教員研修セミナーを企画しました。みなさまのご参加を心よりお待ちしております。</p>
運営委員・講師	<p><運営委員兼講師> 菊地滋夫(明星大学副学長・人文学部教授) 諏訪茂樹(東京女子医科大学看護学部准教授) 藤井恒人(東京農工大学グローバル教育院教授) 福山佑樹(関西学院大学ライティングセンター准教授) 伏木田稚子(首都大学東京大学教育センター准教授)</p> <p><講師> 榊原暢久(芝浦工業大学教育イノベーション推進センター教授) 村山光子(明星大学次長・明星学苑府中校事務長)</p>
定員	50名
参加者	36名
アンケート結果	 <p>■満足 ■どちらかという満足 ■どちらかという不満 ■不満 ■わからない</p> <p>どちらかという満足 17%</p> <p>満足 83%</p> <p>どちらかという不満 0%</p> <p>不満 0%</p> <p>わからない 0%</p> <p>(回答 24名)</p> <p>※ 満足 20名 どちらかという満足 4名 他0名</p>

事業名	第41回大学職員セミナー(オンラインセミナー)
期日	10月31日(土)
主題	新型感染症時代の大学マネジメント ーコロナ危機で変わりゆく大学の姿とマネジメント課題を考えるー
対象	教職員
趣旨	<p>不意に襲ったコロナ禍により緊急事態宣言が発令され、大学もまた、移動および対面でのコミュニケーションが著しく制限されるという想定外の事態を迎えることとなりました。多くの大学は、時代の要請に応じて拡充を続けてきた活動の範囲と内容を大幅に絞り込み、オンライン授業や在宅勤務の導入、そして設置基準等の弾力的運用などにより、これまで不十分ながら社会的役割を果たしてきたところでしょう。激動の半年間を経て、我々はいま、これまでの緊急時対応を振り返るとともに、これからの大学のあり方を抜本的に問い直すべき時期を迎えています。新型感染症の終息の目処が未だついていないなか、学生支援をはじめとして現在停止・縮小している活動について、改めて設計しなおすことが必要となります。在宅勤務を通じて実態が露わになった職員の仕事についても、再編が進むことになり、あるいは、否応なく導入されたICTについて、高い利便性やパフォーマンスが認められる場合には、感染症終息後も積極的に活用されていくことになるでしょう。DX:デジタル・トランスフォーメーションと呼ばれる大きな流れです。また、設置基準等の弾力化という名称のもとに認められた規制緩和によって、大学の経営環境、大学間競争の構造が激変するというシナリオも、現実味を帯びつつあります。本セミナーでは、各大学において展開された多様なコロナ禍への対応状況や課題・問題点等について情報交換を行うと同時に、この危機を乗り越えるために大きく変わりつつある大学の姿とそこでの経営課題について、教育、学生支援、職員の働き方、法人による支援、近未来の大学など、様々なテーマを設定し議論を深めていきます。セミナーを通じて得られた現場の最新動向や将来展望が、受講者の今後の業務に活かされることを期待します。</p>
企画委員・講師	<p><企画委員> 近藤清之(法政大学常務理事) 青木加奈子(新島学園短期大学事務長) 加藤毅(筑波大学大学研究センター准教授) 神山 正之(立教大学キャリアセンター事務部長) 黒田絵里香(慶應義塾塾監局総務部課長・協生環境推進室事務長)</p> <p><基調講演講師> 加藤毅(筑波大学大学研究センター准教授)</p> <p><ファシリテーター> 黒田絵里香(慶應義塾塾監局総務部課長・協生環境推進室事務長) 田中 一平(法政大学総長室付教学企画室) 小池 ゆり(中央大学総合戦略推進室副課長)</p>
定員	60名
参加者	18名
アンケート結果	<p>(回答 13名)</p> <p>※満足 9名 どちらかという満足 4名 他 0名</p>

事業名	古田武彦記念古代史セミナー2020(ハイブリットセミナー)
期 日	11月14日(土)～11月15日(日)
主 題	古田武彦記念古代史セミナー2020
対 象	社会人
趣 旨	<p>『「邪馬台国」はなかった』Revisited and Further Developments</p> <p>古田武彦先生の古代史学の研究は、『史学雑誌』78編9号(史学会 1969年9月20日発行)に掲載された「研究ノート 邪馬壹国」(pp. 45～83)でスタートし、古代史学界に大きな衝撃を与えました。古代史学の研究者を対象に刊行されるこの学術雑誌が一般の読者に読まれることは殆どなかったと思われますが、先生はその内容を一般の読者に向けて解説した『「邪馬台国」はなかった—解説された倭人伝の謎—』(朝日新聞社 1971年11月15日発行)を通して、全ての日本国民に語りかけました。卑弥呼の国は博多湾岸にあり、その国名は「邪馬臺国」ではなく「邪馬壹国」であったことを理路整然と主張するこの本を読んだ人々は、学校で教えられた古代史との違いに驚き、目から鱗が落ちたことでしょう。しかし、最も注目すべきことはその結論ではなく、そこで用いられている学問の方法です。研究遂行において古田先生が用いた「武器」は「論理」です。先生は、「論理の導くところに行こうではないか。たとえそれが何処に到ろうとも。」を座右の銘として、客観的に論理を展開することに徹しました。根拠資料の客観的な活用に基づき客観的且つ緻密な論理を展開することによって史実に迫る、これこそが古田先生の古代史学の研究方法です。今回このセミナーを企画するに当たって、ミネルヴァ書房版の『「邪馬台国」はなかった』を丁寧に読み返してみました。驚いたことに、50年前に読んだ時とは随分印象が違いました。50年前には気付かなかった疑問等がたくさん見付き、先生が御存命ならば是非お聞きしたいと思いました。このセミナーでは、『「邪馬台国」はなかった』で扱われている基本的なテーマについて現在の視点に立って読み返すことにより、古田先生の古代史学の研究方法を再確認するとともに、その後の発展についても触れて頂く講演をお願いしました。講演を巡って建設的な議論が盛り上がることを期待しています。このセミナーは、研究者のみならず、古代史に関心を持つ全ての人を歓迎します。このセミナーが、若い人々が真実の古代を覗く窓になれば幸いです。</p> <p>このセミナーは、大学セミナーハウスと多角的古代研究会、東京古田会、古田史学の会及び古田史学の会・東海が共同で開催します。</p>
実行委員・講師	<p><実行委員></p> <p>荻上紘一 大墨 伸明 荻野谷正博 橘高 修 竹内 強 西坂 久和 富川ケイ子 和田 昌美</p> <p><講師></p> <p>大越邦生 大墨 伸明 大下隆司 正木裕 鈴岡潤一 西坂久和 古賀達也 中村通敏 富永長三</p>
定 員	60名
参加者	54名(会場 28名 オンライン参加者 26名)
アンケート結果	 <p>■満足 ■どちらかという不満 ■どちらかという満足 ■不満 ■わからない</p> <p>どちらかという不満 6%</p> <p>どちらかという満足 33%</p> <p>満足 58%</p> <p>不満 0%</p> <p>わからない 3%</p> <p>回答(会場 15名 オンライン 18名)</p> <p>※満足 19名 どちらかという満足 11名 どちらかという不満 2名 わからない 1名</p>

2021 年度事業報告 附属明細書3 留学生会館入居状況

1. 2022 年 3 月 31 日現在入居状況

学校名	所属			計	性別	
	大学院生	学部生	教授		男性	女性
東京都立大学		2	1	3	3	
東京工科大学		1		1		1
合計		3	1	4	3	1

2. 国別留学生数

国名	計	大学院生	学部生	教授
中国	1		1	
フランス	1		1	
インド	1		1	
エジプト	1			1
合計	4		3	1

2021 年度事業報告 附属明細書4 留学生論文の表彰に関する事項

留学生論文コンクールは留学生の日本語による論文作成能力を向上させる機会を提供するとともに、日本留学の成果を発信し、国際相互理解及び国際交流を促進することを目的に 2009 年度から実施している。

1、応募作品数:27 作品

2、応募者内訳

(1)大学数:23 大学

(2)国籍:7 つの国と地域

3、入賞作品一覧

賞別	氏名	大学名	国籍・地域	論題
金	CHOI JEYOON (チェ ジェユン・)	東北大学 大学院医学系研究科	韓国	感染症がもたらした差別、我々はどう向き合うべきか
銀	カン・ユンジ	早稲田大学アジア太平洋研究科	韓国	ウィズコロナ時代のデジタル・ディバイドの拡大とその対策
銅	張佳晏 (チョウ カアン)	東京都立大学 都市環境学部	台湾	氷底湖と急激な気候変動
銅	張 世熙(ジャンセヒ)	琉球大学 人文社会学部	韓国	持続可能な観光に向けた提言

2021 年度事業報告 附属明細書 5 日本語論文の書き方講座に関する事項

1. 事業説明

学術的な日本語や論文の書き方の実践的な指導を行うことにより、留学生の学力や研究能力の向上に寄与したいと考えて 2020 年度より講座を開講したが、受講が特定の留学生に偏った結果となり、2021 年度をもって中止とすることとした。

2. 指導内容

レジュメ作成、レポート執筆、卒業論文執筆、修士論文執筆、博士論文執筆、査読論文執筆、研究計画書執筆、志望理由書執筆、添削指導(ネイティブ・チェック)

3. 指導形態 オンライン個人指導

4. 講師 1 名

5. 2021 年度 受講状況一覧

受講の目的	回数
レポート執筆	11
博士論文執筆	245
卒業論文執筆	2
修士論文執筆	10
研究計画書執筆	24
添削指導(ネイティブ・チェック)	12
査読論文執筆	1
その他	7
計	312

国 別	人数	回数
中国	8	64
台湾	1	244
ベトナム	1	2
韓国	1	2
計	11	312

	大学数	院・学部別人数	受講回数	
会員校	3	大学院	2	261
		学部生	6	32
一般校	3	大学院	1	6
		学部生	2	13
計	6	11	312	